

◆ 第8回 牛のヒップを良く見ましょう

順調に妊娠が続いている時は、人工授精後275日目頃から分娩の準備をしておかなければなりません。

多くの牛は、人が何も手をかけなくても子牛を分娩し、健康で良質の牛乳を生産し、3カ月程の間で次の妊娠が始まり、予想以上の高値で子牛が売れるとボーナスの喜びを味わうことができます。しかし、分娩は銀行に預けたお金にどの程度利子がついて払い戻されるかを定める大切な時期です。もし、少し夜遊びが過ぎると「難産で残念ですが淘汰です」と、獣医師に宣言され廃用認定の書類を受け取る事になります。そこで、分娩が近付いた時の変化について整理しましょう。

分娩の時期が近付くと(1週間以内)、発情期と似た生殖器周辺の変化が見られます。外陰部は水膨れ(浮腫)がひどくなり、陰唇(いんしん)・陰裂(いんれつ)は力無く、長くなり、触るとマンジュマロのように柔らかく、陰核にアメ色の粘液を付けている事があります(血液や膿が混ざっている時は獣医師に連絡する)。このような変化は個体で少しずつ違うので、記録をしっかりと書いておきましょう。

さらに、乳房や乳頭はテカテカと光り、乳頭の先端(乳頭口)には「やに」の様な物の付着が見られ、時に乳が流れ出る事(射乳)もあります(乳房炎の症状はありませんか?)。

注意して観察すると、尾の付け根(尾根部)は盛り上がったようになり、尾を持ち上げると力無く、つきたての餅の様な感じとなり、分娩2～5日前から腰角～臀端～尻で囲まれた部位が大変柔らかく、沈んだようになります(尾根部の両側、骨盤靭帯、または仙座靭帯の緩み)。さらに、分娩1～2日前の体温は37～38度と平熱より0.5～1.5度程低くなります(朝と夕方に測る。牛の体調を知る事もできるので、毎日記録する事を勧めます)(表1参照)。

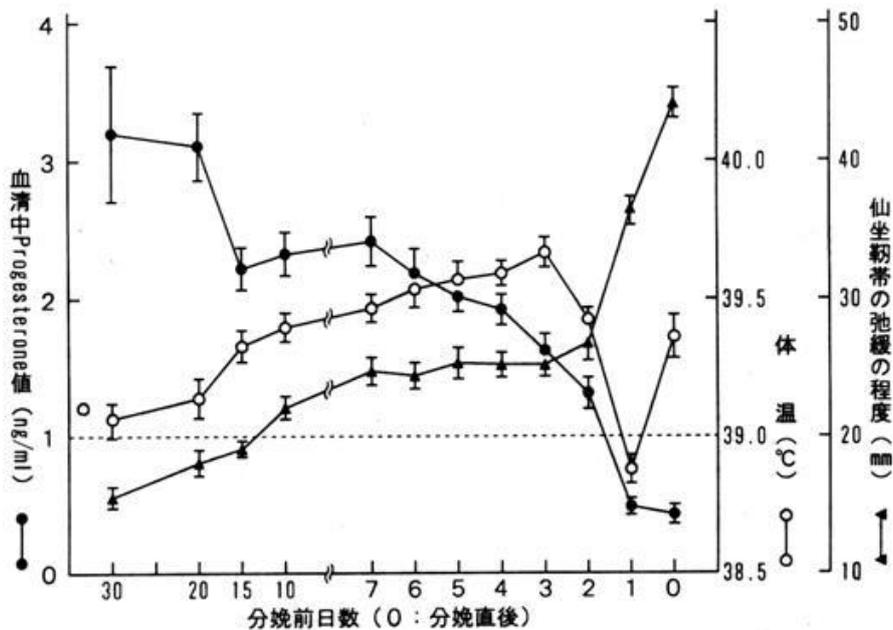


表1：牛の分娩前の体温（○）、仙座靭帯の緩み（▲）、並びに血中黄体ホルモン値（●）の変化（中尾：2000）

野球なら「逆転サヨナラ」にならないよう、よく太陽に当て、乾燥したたっぷりのわらを敷き、広い分娩室でお産ができる様に牛に気配りをしましょう！